

【巻頭言】

学友会活動に参加しましょう

企画委員 野間和夫(短2 回生)

本部理事、短期大学2 回生の野間和夫です。私の勤務する滋賀医科大学附属病院には38 名中16 名と多くの卒業生が働いています。近年は、新型コロナウイルス感染症の影響で、いろいろと活動制限される状況下でしたが、最近ではコロナ禍前の状況に戻り、綺麗に整備されたあづまやでのバーベキューも行われました。急速に普及した Web 開催の学会や会議など現在も利用され以前よりも良くなったと感じています。医療における技術進歩も毎年のようにあり、診療放射線技師として30 年余りで大きく変化しています。エックス線の検出器はアナログからデジタルになり、最近では人工知能(AI)の臨床応用など、コンピュータの進により普及してきました。近年、放射線治療を担当していますが、昨年度リニアックを更新したので、去年と今年とで大きく進歩しています。具体的にはサーマルカメラと光学カメラを組み合わせた Surface Guided Radiation Therapy (SGRT) システム ExacTrac Dynamic (BrainLAB) を導入したことで、CT 計画や照射のために皮膚に印を書くことは無くなり、皮膚マーカースを実現しています。また照射中のリアルタイム位置モニタリングには体表面温度を利用しています。これらは今後の主流になると考えています。また人工知能(AI)を使った画像診断や放射線治療などが急速に普及してきています。そこでAI の技術を活用した「Zero Click Auto Contouring」を昨年度導入し、CT 撮影後に「ゼロクリック」でのコンツォーリングを可能とする syngo.via RT Image Suite (Siemens Healthineers) を臨床使用しています。システム構築は得意とするところなのでAI の導入を積極的に進めています。

近年、スクリプト機能(プログラミングした言語をコンピュータが理解し、実行できるようにする)を搭載した治療計画装置が増え標準機能となると予想されます。治療計画およびプランチェックにスクリプトを組むにあたり標準機能だけではなくプログラミングの知識は必須と考えていますが、治療計画装置の標準機能ではできない作業をスクリプトで行うことによって「機能拡張」が実現可能であり、今後、AI とスクリプト機能を利用しフルオートでの治療計画をいつの日か実現できればと思っています。

日々、医療機器は進歩しますが放射線を扱うことは昔から変わりません。画像工学やプログラミングの知識は今も応用できます。アナログからデジタルになりましたが放射線技師として扱う医用画像は変わりませんし、むしろデジタルになり扱いやすくなりました。

学校も専門学校、短期大学、大学と移り変わる中、学友会も常に進化し、成長しています。皆さんの参加が、学友会の活動をさらに充実させること間違いありません。ぜひ学友会に参加していただき交流を持つことで新たな知見も得られると思います。皆さんのご参加を心から歓迎し、学生との架け橋となることを目指しています。



以上